白い虎

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白い虎

【Ｎコード】
Ｎ４２１７Ｖ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
元マレーシア軍人マドールは白い虎を狩りにジャングルの中に入った。そしてその白い虎を遂に照準の中に見たが。虎はライオンよりも大きいです。

第一章

白い虎

アブドル＝マドールはかつては軍人だった。
軍で狙撃兵部隊を率いていた。指揮官としても有能と言われており勘が鋭かった。だがその銃の腕はさらに凄いものだと評価されていた。
まさに百発百中であった。マレーシア軍においてその人ありとも言われていた。
しかし今は軍人ではない。定年で退役して悠々自適の生活を送っている。
だがそれでもだ。銃は手放していなかった。その趣味はだ。
「またなのね」
「そうだ、暫く家を後にする」
こうだ。長年連れ添っている妻に対して言うのだった。
「そうする」
「狩りね」
「ジャングルに入る」
こう簡潔に話す。
「獲物はわからない」
彼の趣味は昔から狩りだ。スナイパーらしいと言えばらしい。
「だがいい獲物を撃つ」
「命は大事にしてね」
夫の趣味をわかっている妻はだ。こう告げるだけだった。
「くれぐれもね」
「わかっている。死にはしない」
妻にだ。皺のある褐色の顔を向けて答える。白くなっている髪は短く刈り引き締まった顔である。やや小柄だが無駄のない均整の取れた身体つきだ。軍人を退職してもだ。身体は健在であった。

「軍人の仕事は生きて勝つことだからな」
「だからなのね」
「そうだ。ではな」
こうしてだった。彼は愛用のライフルを手にジャングルに入った。無論一人ではない。
現地に詳しいガイドを雇い彼と二人でジャングルに入った。その緑の鬱蒼としたジャングルの中でだ。
テントを張ってその中に入ったところでだ。中年の、いささか髪の毛の薄いそのガイドが彼に話すのだった。
「くれぐれもです」
「毒蛇や蠍だな」
「はい、まずはそれに注意して下さい」
このことを言うガイドだった。その顔は真剣だ。
「血清は用意していますけれどね」
「それでもだな。咬まれたり刺されたりしないに限る」
「それに越したことはありません」
「わかっている。毒はな」
「ご注意を。それとです」
凱どの話は続く。彼も仕事だから真剣だ。
「オランウータンは撃たないで下さいね」
「保護されているからだな」
「はい、撃ったらことです」
こうマドールに話すのだった。
「ちょっとやそっとの問題ではありませんから」
「オランウータンは注意か」
「他は撃ってもいいです」
「豹とかはいいな」
「はい、むしろこのジャングルは豹が多くて」
そのことにだ。困っているという口調であった。
「減らす必要がありまして」

「自然環境の保護か」
「それと人間の保護です」
ガイドの言葉は少し冗談も入れたものになった。
「ジャングルから出て来て子供を襲うなんてことも有り得ますから」
「だから余計にだな」
「はい、それに豹だけじゃありません」
他にもいるというのだ。ジャングルには実に様々な動物がいる。
それはこの国のジャングルでも全く同じことであるのだ。ジャングルは動物の楽園でもあるのだ。
「虎もです」
「虎もか」
「はい、二匹や三匹撃ってもいいですから」
ガイドは真剣な顔に戻って話をする。
「ちょっと減らしておかないと。食物連鎖とかがですね」
「厄介な話だな、その辺りは」
「正直旦那が来てくれて有り難いんですよ」
今度は感謝する顔になってだ。マドールに話すのだった。

第二章

「虎や豹を獲物にするスナイパーって実はですね」
「少ないか」
「危ないですから」
それでだというのである。
「こっちが狙われるかも知れない相手を狙うっていうのは」
「殺すか殺されるかは避けたいか」
「はいですから」
「それの何が面白い」
マドールはそこに何の価値も見出してはいなかった。
「戦争ではそんなことも言っていられない」
「向こうも攻撃してきますからね」
「そんな狩りは只のお遊戯だ」
こうまで言い切る彼だった。
「やるからにはだ」
「こちらも狙う相手を撃ってこそですね」
「そうだ、それでこその狩りだ」
その考えをだ。己の口で語った。
「俺はそう思う」
「わかりました。じゃあ御願いしますね」
「豹も虎も撃つ」
彼は言った。断言だった。
「そうするぞ」
こうしてだった。彼はそのテントを拠点として狩りをはじめた。
まずは大きな豹を仕留めた。
見れば年老いた雄の豹だった。ガイドはその豹、木から落ちたそれを見てこうマドールに話す。上は緑に覆われ日も見えない。足元は絡まる雑草と倒れた木々がありだ。碌な足場もない。まさにジャ

ングルの中だ。
その中でだ。彼はマドールに話すのだった。
「こいつは。何度もですね」
「人でも食ってきたか」
「あっ、食い殺された人はいません」
幸いにしてそうした犠牲者はいないのだという。
「けれど。賢い奴でしてね」
「それでか」
「はい、多くのスナイパーを出し抜いてきました」
そうした豹だったというのである。
「すばしっこくて。厄介な奴でしたよ」
「その豹を俺が撃ったか」
「凄いですね。こいつに気付かれずに一撃でなんて」
「撃つからには必ず仕留める」
マドールは確かな声で言い切った。
「二発目はない」
「それはないんですか」
「一発撃って外れたらそれで終わりだ」
マドールはその顔を厳しいものにさせていた。そこにあるものはまさに命と命のやり取り、それであった。
「相手が気付いてやり返してくる」
「それを避ける為にですか」
「一発で仕留める」
それでだというのだ。
「そうするのが俺の考えだ」
「そういえば旦那は元は」
「軍人だった」
ガイドにこのことも話した。最初の契約の時にも話しているが今もだった。
「スナイパーだった」

「それで、ですね」
「そうだ。スナイパーの仕事は一撃で仕留めることだ」
まさに一発必中である。それがスナイパーの信条であった。
「だからだ。外しはしない」
「相手が誰であってもですね」
「獣でもな」
同じだというのだった。
「それは同じだ」
「まさにやるかやられるかなんですね」
「一度外せば少なくともだ」
「少なくともとは？」
「その場にいてはならない」
そうしたものだというのだ。彼は真剣な顔で話す。

第三章

「そうしたものだからな」
「成程、狩りそのものですね」
「そういうことだな。俺は結局今もスナイパーということだ」
「ハンターではなくですね」
「そうですか」
こうした話もするのだった。そしてそれからもだった。
彼は狩りを続けた。ガイドも共にいる。暫くはこれといった獣を狩ることはできなかった。食糧として小さな獣を手に入れるだけだった。
その中でだ。鰐を撃ってそれを食べている時にだ。ガイドがこんな話をしてきた。
「この森にはですね」
「まだ多くの獣がいるな」
「はい、特にです」
ガイドが炙った鰐肉を食べながらマドールに話す。
「虎です」
「虎か」
「一匹凄い虎がいます」
こう話すのだった。
「この森の主ともいう虎でして」
「そこまで凄い虎なのか」
「もう何年生きているかわかりません」
まずはその歳から話す。
「とにかく。古い虎でして」
「老虎か」
「しかも大きいです」
虎は大きい。実はライオンよりもまだ大きいのだ。その大きさも

ありだ。虎は非常に強いのだ。だからこそハンターからも狙われるのだ。見事な毛以外の理由もある。
「色は白です」
「白虎か」
「そうした虎です」
「凄い虎なのはわかるな」
それは察するというのである。
「それならだ」
「狙われますか」
「そこまでの虎がいるのならだ」
彼は言った。はっきりとだ。
「狙いそうしてだ」
「仕留めずにはいられませんか」
「スナイパーとしてな」
最早だ。ハンターではなくなっていた。己をスナイパーと言うのだった。
「絶対にだ」
「わかりました。それではですね」
「その白虎がいる場所に案内してくれ」
早速であった。ガイドに対して言う。
「今からな」
「ええ。それじゃあ」
こうして彼はガイドに案内されジャングルの中を進みその白虎がいる場所に向かう。しかしそこは。
ジャングルの中を中に、中にと進んでいく。深い密林の中をかき分けてだ。その中でだ。彼は前を進むガイドに尋ねたのだった。
「聞いていいか」
「何ですか？」
「その虎はこんな深い場所にいるのか」
「はい、そうなんです」

まさにそうだというのである。
「このジャングルの一番深い場所にいます」
「そこがそいつの縄張りか」
「人にとっては聖域と呼んでますね」
「聖域か」
「はい、まさにそれだと」
「神か何かか」
マドールは聖域と聞いてだ。ついこんなことを言った。
「現地の宗教のそれか」
「そうですね。とにかく凄い虎ですから」
「だからか」
「はい、誰もがそう言います」
また言うガイドだった。彼にしてもだ。語るその声には憧れがあった。その白い虎、マドールがまだ見ていないその虎に対する。

第四章

「神の如き虎だと」
「そしてその虎をだ」
「撃たれますね」
「そうする。だからここまで来ている」
彼は言った。静かだが強い声でだ。
「そうする」
「わかりました。じゃあ今回もですね」
「一撃で決める。必ずな」
ライフルは背負っている。ただ腰には拳銃もある。いざという時にはそれで身を守る為だ。それはガイドも同じだ。ナイフも持ってだ。
そのうえでだ。遂にジャングルの最も深い場所に入った。
森はさらに深い。木々が鬱蒼と茂りだ。
そしてそのうえでだ。気配が感じられなかった。
マドールはその中を見回しながらだ。ガイドに尋ねた。
「ここか」
「はい、ここです」
「ここにその虎がいるのか」
「そうです。ただ何処にいるのかはです」
「それははっきりとしないか」
「はい、注意して下さい」
ガイドもだ。警戒しながら周囲を見回している。何しろジャングルである。何時何処から何が襲い掛かってくるかわからない。そうした場所だからだ。
警戒しながらだ。また言う彼だった。
「白い虎だけとは限りませんからね」
「他の獣もだな」

「豹も蛇もいますしね」
「警戒しないとな」
「はい、死なないで下さいね」
「そうだな。本当にな」
マドールも真剣な顔で述べる。そうした中でだ。
二人は虎を探した。そこでまた言うガイドだった。
「虎はですね」
「水が好きだな」
「ええ。特に池が」
「この中に池はあるか」
「はい、あります」
そのものずばりだった。あるというのだ。
「ここから少しいった場所に」
「ではそこで張り込むか」
「そうしますね」
「それが一番いいな。ではその池にな」
「案内しますね」
「頼むな」
彼等はその池に向かった。池はジャングルの中にあった。緑色で底が全く見えない。そうした池がだ。ジャングルの中にぽつんとあったのだ。
マドールは木の陰に隠れながらその池を見てだ。共にいるガイドに対して話した。
「あそこに虎が来れば」
「その時にですね」
「撃つ」
一言だった。
「必ず仕留める」
「白虎ですからすぐにわかりますしね」
白虎は普通の虎よりもまだ目立つ。そのことも話が為される。

「それでですね」
「そうだ。だが」
「だが？」
「白い虎か」
それについてだ。彼は話すのだた。
「実際にこの目で見るのははじめてだな」
「そうなんですか」
「珍しいからな。白い虎というのは」
「言われてみればそうですね」
その通りだとだ。ガイドも頷く。
「アルビノでしたっけ。それって」
「欧州の言葉ではそうなるな」
「そうですね。それですね」
「珍しいな、確かに」
マドールはまた言った。

第五章

「その白い虎を撃つか」
「見事な毛皮が手に入りますね」
「ああ、そうだな」
虎はその毛皮もまた有名である。美しいとだ。高値で取引もされる。マドールもそのことはよく知っているのだ。それでなのだった。
ただ、だ。彼はここでこうも言った。
「毛皮には興味がないがな」
「あくまで狩りだけですか」
「そうだ、それだけだ」
毛皮には興味がないというのだ。興味があるのは狩りだけだった。
そしてだ。池の方を見る。するとだ。
そこに来た。遂にだ。
白い大きな虎がだ。のっそりといった感じで出て来た。マドールはその虎を見た。
見てだ。そうしてだ。
狙おうとする。ライフルを構える。
照準の中に虎の姿が入る。そこからも虎を見る。その姿は。
見事なまでの、芸術品とさえ思える美しさだった。その美しさを見てだ。
彼は動きを止めてしまった。引き金にかけていた指が動かなくなった。
引こうとする。だがどうしてもだ。指が動かない。そして遂にはだ。
照準を外した。そうしてしまった。
ガイドはそれを見てだ。驚いてこう彼に言った。
「あの、一体どうしたんですか？」
「駄目だ、あれは」

「駄目とは？」
「狙えない」
こうガイドに言うのだった。
「あの虎はとても」
「また何故ですか、それは」
「見事過ぎる」
だからだというのだ。
「あまりにもな。奇麗だ」
「確かに見事な毛並みですね」
「あそこまで奇麗だと撃てはしない」
そしてだ。マドールはこうも言った。
「撃ってはいけない」
「そこまでの虎ですか」
「そう思う。撃てない」
また話す彼だった。
「あの虎は撃ってはいけない」
「撃ってはいけませんか」
「人がどうこうするには見事過ぎる」
マドールの言葉は続く。虎を褒める言葉だった。
「だからだ。撃たないでおこう」
「そうされますか」
「そうする。それではな」
「帰りますね、今から」
「そうだ、帰ろう」
穏やかな声になっていた。自然にだ。
「ここから去ろう」
「わかりました。それでは」
「しかしな」
「しかし？」
「こんなことははじめてだ」

聞けばだ。マドールの言葉は呆然となっていた。自然とそうなってしまっていた。
「撃てなかったのはな」
「それだけの虎でしたか」
「美しいものを汚してはいけない。そんな考えを俺が持つなんてな」
苦笑いさえ浮かべていた。そうなってしまっていた。
「不思議なものだな」
「誰だってそうした考えは持ってますよ」
ガイドは笑顔で彼にこう話した。
「やっぱりね」
「持ってるか」
「はい、持ってます。ただそれに気付かないだけで」
「そういうものか」
「当然旦那もですね。持ってますから」
「だから俺は撃たなかった」
「そういうことになりますね」
これが彼に話すことだった。
「じゃあまあ。撃たないってことで」
「あの虎はあのままにしておこう」
「ええ、そうしましょう」
こう話してだった。そのうえでだ。
マドールはライフルを背中に戻してそのうえでだ。その場を去った。ガイドもそれに続く。
池のところには水を飲むその白い虎がいた。その姿はあまりにも美しく。そこにいるだけでだ。芸術の世界をそこに作り出していた。

白い虎　　完

2011.2.23

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4217v/

白い虎

2011年8月2日03時28分発行